

氏名	しまだ ゆき
学位(専攻分野)	島田有紀
学位記番号	博士(学術)
学位授与の日付	博甲第414号
学位授与の要件	平成18年3月24日
研究科・専攻	学位規程第3条第3項該当
学位論文題目	工芸科学研究科 機能科学専攻
	「狩野元信に関する一考察 一元信筆白鶴美術館蔵「四季花鳥図」の革新性と古法眼の受容ー」
	(主査)
審査委員	教授 並木誠士
	教授 太田喬夫
	教授 日向進

### 論文内容の要旨

本論文は、わが国の中世から近世への転換期、つまり16世紀の画壇において重要な位置を占め、また、明治時代まで続く絵師の流派である狩野派の基礎を築いた狩野元信の意義を作品分析と受容史の観点から明らかにしようとするものである。

従来、障壁画・絵巻などで指摘されることの多かった狩野元信の革新性を屏風絵という視点から詳述する第一部と、16世紀において、絵画表現だけでなく工房制作システムなど幅広い革新をおこなった狩野元信が江戸時代にどのような画家像として定着、浸透していたかを文献史料から明らかにする第二部から構成されている。

第一部では、白鶴美術館蔵四季花鳥図屏風について詳述しており、当時の人びとにとって理想的であると考えられていた情景に当時舶載され珍重された孔雀を配した作品としていた従来の一般的な見解とは180度異なる視点を提示している。とくに第4章では、16世紀までの庭園の系譜とその鑑賞を考慮に入れることにより、この作品に描かれているのが、当時の人びとにとって現実感のある情景であり、そこに描かれている孔雀は、現実の孔雀にさらに仏画などの理想の鳥のイメージを重ね合わせることにより造形化された架空の鳥であるとの解釈を提示している。このような新しい視点を提示することにより、後続絵師に大きな影響を与えたこの四季花鳥図屏風の、後続の作品には見られない独自性を指摘している。

第二部は、江戸時代における狩野元信の受容を論じたものである。第5章で、江戸時代の画論に見られる元信受容を、現存する画論を詳細に分析することにより、元信崇拜や元信批判などさまざまなカテゴリーに分類して論じている。このような画論分析は、従来も個別の画論についてはおこなわれていたが、ここでは、狩野元信に視点をあてて横断的かつ体系的に分析している。このような、いわば絵画制作の場における元信受容に加えて、第6章では、狩野元信を主人公とする歌舞伎に注目することを手がかりに、芸能という庶民へのひろがりをもったジャンルにおける元信の浸透を分析している。これにより、絵画を鑑賞・受容する層への元信イメージ浸透の実態が示され、それにより、元信がその実際の絵画制作から離れて幅広く受容されている様相が明らかになっている。

## 論文審査の結果の要旨

従来、障壁画・絵巻などで指摘されることの多かった狩野元信の革新性について、本論文の第一部では白鶴美術館所蔵の四季花鳥図を対象として、屏風絵という視点から詳述している。これは従来の研究の補完的な意義をもつものであるが、それだけにとどまらず、作品解釈において、描かれた情景を16世紀の庭園との関係で、つまり絵画受容者の体験として庭園と屏風絵を並列して考察するという点において、これまでの様式論的な作品解釈を一步進めた研究となっている。

第一部後半で、上記した屏風絵における革新性と従来指摘されている障壁画・絵巻における革新的な性格を総括して、16世紀の画壇における狩野元信の意義を確認したうえで、第二部では、江戸時代における狩野元信受容の実態を、絵画の制作の場だけではなく、著名な絵師としてのイメージの流通・定着過程までを視野に入れて分析している。従来、狩野元信の作品が江戸時代の絵師たちにとって、一種の規範として受容されていたことは指摘されていたが、本論考のように、絵画を鑑賞あるいは受容する人びとの間に画家イメージが浸透してゆく過程を、歌舞伎を中心とする芸能の浸透と重ね合わせて論じる視点は、受容史の観点からも新しい見解を多く含んでいる。

中世から近世への転換期において、絵画表現だけでなく絵画制作システムの形成に関しても新しい体系を作り出して明治時代まで続く狩野派の基礎を築いた狩野元信の美術史上における位置を、作品分析と史料解釈の両面から明確に提示している点で、本論文は注目に値する。

本論文の内容は、申請者による下記の学術学会誌の査読論文2編として公表されている。

①島田有紀「狩野元信筆白鶴美術館蔵「四季花鳥図屏風」における理想郷

－浄土および現実の庭の要素を手がかりに』

『美学』(美学会学会誌) 223号 (2006年1月)

②島田有紀「江戸時代の画論にみる狩野元信の評価」

『デザイン理論』(意匠学会学会誌) 46号 (2005年5月) 2005年度意匠学会論文賞受賞